

指導資料



鹿児島県総合教育センター

音楽 第38号

- 中学校対象 -

平成21年5月発行

中学校音楽科における言語活動の充実 - 鑑賞における指導の工夫を通して -

言語活動の充実は、今回の学習指導要領改訂において、各教科を貫く重要な改善の視点であると示され、各教科等における言語活動の充実が求められている。

そこで、本稿では、中学校音楽科の指導における言語活動の充実について、鑑賞指導に焦点をあて、その工夫について述べる。

1 音楽科における言語活動

音楽科における言語活動には、次のようなものがある。

生徒が音楽に関する用語や記号なども含めながら、言葉を用いて音楽のよさや美しさを生み出している様々な要素の働きについて説明すること。

音楽によって呼び起こされる自己のイメージや感情を意識したり、確認したりして、それを比喩的な言葉で表すこと。

音楽を聴いて、根拠をもって自分なりに批評すること。

音楽によって表現したいイメージを伝え合ったり、他者の表現や思いに共感したりすること。

歌詞の内容や言葉の特徴を生かして歌ったり、日本語の持つ美しさを味わったりして、言葉と音楽の関係を大切にすること。

このような音楽科における言語活動を通して、音楽科で身に付ける能力を高める必要がある。

さらに、今回の学習指導要領改訂においては、言語活動を通して、音楽科の目的を実現するために指導の内容において、以下のことが示されている。

言葉の特性を理解し、それを生かして歌うこと(歌唱)

歌詞と音楽との関係を大切にすること(歌唱)

言葉の特徴を感じ取り、簡単な旋律を作ること(創作)

言葉で説明することや、根拠をもって批評すること(鑑賞)

また、この際、重要な役割を果たすのが言語である。ここでいう言語の役割とは、「知的活動(理論や思考)の基盤」、「コミュニケーションの基盤」、「感性・情緒の基盤」の3つであり、それぞれの観点から言語活動

を行う能力を培うことも大切である。

このことから、音楽科の指導計画にこれらの言語活動を位置付けるとともに、授業の構成や進め方などを改善する必要がある。

2 鑑賞活動における指導の工夫

これまでの鑑賞の授業では、「曲を聴いて感想を書かせる」、「作曲者の国名や曲名など知識を中心に教える」などの授業が展開されており、生徒主体の授業が十分であるとは言い難い状況が見られた。このため、この時間で何を学ぶのか、どのような力を身に付けるのかなど学習の目標と内容が明確でないままに授業を展開していることもあった。

そこで、このような受動的な学習から、生徒が意欲的に取り組み、生徒自ら音楽の活動にかかわりのもてる学習を展開するために言語活動を生かした以下のような指導の工夫を行う必要がある。

(1) 比較鑑賞の工夫

音楽の諸要素やその働きに気付かせるために、効果的なのが比較鑑賞である。同じ曲を違う演奏形態で聴き比べるなど、曲そのものを比較することは効果的であり、生徒が表現することへの意欲や関心を高めることができると考えられる。例えば、曲の一部を聴き、速いテンポと遅いテンポで演奏した場合を比較して鑑賞させる。そして、生徒に「速度が速いと気持ちが高まる感じが鋭い感じがする。」「速度がゆっくりして落ち着いた感じが穏やかな感じがする。」など、どちらが

曲にふさわしい表現になるかをみんなの前で発表させたり、ワークシートに書かせたりする。

このことは、生徒に、速度を知覚させ、速度をもとに曲の感じをとらえさせることができる。

このように、生徒に音楽の諸要素を知覚させるとともに、それを感受することを関連付ける学習が展開できるような比較鑑賞を工夫することが必要である。

(2) お互いに批評し合う場の工夫

生徒は、曲を聴いて感じ取ったことを自分で説明したり、友人の意見や感想を聞いたりすることを通して、音楽に対する多様な感じ方や考え方などに触れることができる。

このことによって、生徒は、自分の曲に対する思いや意図、イメージを相手に伝えたり、相手の思いやイメージなどをとらえたりして、批評を共感したり、共有したりすることもできる。

よって、このような活動を充実させるために、ペアやグループ、全体で批評し合う場を設定し、コミュニケーションを図る指導を工夫する必要がある。

(3) 自分なりの解釈で批評させる指導の工夫

生徒が身近にある音楽について、そのよさや価値を感じ取った上で、表現してみたいという欲求や意欲をもつようになることは大切である。よって、生徒自身にそのような意欲や興味・関心をもたせるために、多様な音楽に触れさせ、曲を聴いて自分なりの解釈をさせたり、イメ

ージを絡めて曲のよさや美しさを批評させたりするなどの言語活動を取り入れた鑑賞活動を体験させることが必要である。

また、「きれいだ」、「楽しい」などの表層的な表現に終わらないようにするために、音楽に関する用語や記号を意図的に入れさせたり、作曲家の人物像や楽曲の背景となる歴史や文化について事前に調べさせたりすることが大切である。

そして、生徒に、なぜそのような情景を想像したのか、なぜそのような感じをしたのかということを感じ取らせ、それが自分にとってどのような価値があるのかを考えさせていくことが大切である。

このことから、音楽に関する言葉などを用いながら、音楽に対して、生徒が、根拠をもって自分なりに批評する力を育

成するような指導の工夫が必要である。

そして、これらを通して、生徒が音や音楽を知覚する力、よさや美しさを感じ取る力、それを生み出している音楽の特徴について考える（思考・判断する）力を育成することが大切である。

3 実践例

次は、第2学年題材「オーケストラの響きを味わおう」の実践例である。

これは、生徒に、曲を比較して鑑賞させたり、批評し合う場を設定したりするなど、言語活動を充実させるための指導の工夫や教師の働きかけを示したものである。

そして、生徒が、音楽を批評することによって、より一層音楽を心豊かに聴き味わうことにつながると考える。

(1) 教材「交響曲第5番八短調 作品67」 ベートーベン作曲

(2) 指導計画(全4時間)

(ゴシックは言語活動に関連する部分)

時	学習活動	教師の働きかけ	評価規準	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> 交響曲第5番八短調の第1楽章を聴く。曲名、作曲者を確認する。 第1楽章の第1主題をとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> 2つの主題を取り出して聴かせ、主題をとらえさせる。 第1主題が動機の部分のリズムによって構成されていることに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1楽章の2つの主題をとらえることができたか。 動機の部分のリズムが聴き取れたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 自己評価
2	<ul style="list-style-type: none"> ソナタ形式について理解する。 第1楽章を鑑賞し、音楽の諸要素と曲想とのかかわりを感じ取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ソナタ形式については理論的なものにとらわれないようにする。 各楽章ごとのテンポの変化に気付かせ音楽の諸要素がどのように変化したか感じ取らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ソナタ形式など交響曲の構成美を感じ取れたか。 第1楽章の2つの主題が、楽曲全体を通して扱われ、それが反復、変化・発展しながら演奏されていることを理解できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 自己評価
3	<ul style="list-style-type: none"> 古典派の音楽の特徴と楽曲とのかかわりについて理解する。 楽曲に込められた作曲者の思いともかかわらせながら、楽曲に対する生徒自身の考えや味わいを批評文として書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 曲全体の感想だけでなく、楽曲の諸要素、主題の反復、変化・発展など、多様な面からまとめさせる。 困難を乗り越えて、力強く生き抜いた作曲者の生き方を知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各楽章の主題と、第1楽章の主題が深い関連があることを理解することができたか。 作曲者についての関心が高まったか。 楽章から楽章への変化が感じられたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 自己評価
4 本時	<ul style="list-style-type: none"> 批評文を発表し合い、お互いの感じ方や見方の違いについて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 自他のよさを見つけ、認め合うことができたり、自分の考えを素直に発表したりするなど、互いの意見を共有できるような雰囲気をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの根拠をもって批評することができたか。 他者の意見や考え方も取り入れようとしているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 自己評価 相互評価

